

道徳教育の充実

学校は、子どもたちの豊かな人格を形成していくとともに、国家・社会の形成者として必要な資質を培う場である。しかし、現在、子どもの自制心や規範意識の希薄化、生活習慣の確立が不十分であることなど、子どもたちの心と体の状況にかかわる課題は少なくない。学校における道徳教育は、それらへの対応をいかに行うかが大きな課題となる。

道徳教育を進めるに当たっては、推進体制を充実し、教師と子ども及び子ども相互の人間関係を深めるとともに、子どもが道徳的価値の自覚を深め、家庭や地域社会との連携を図りながら、豊かな体験を通して子どもの内面に根ざした道徳性を育成することが求められている。その際、特に道徳教育の連続性、一貫性及び家庭・地域社会における教育との関連性、一貫性に留意する必要がある。

1 推進体制の充実

道徳教育の充実・改善のための基本方針の一つとして、学校全体で取り組む道徳教育の実質的な充実を図る視点から、推進体制等の充実を図ることが求められている。

(1) 道徳の指導計画の作成

各学校においては、校長の方針の下に、道徳教育推進教師を中心に、全教職員が協力して道徳教育を展開するため、次のことを踏まえた指導計画の作成が求められる。

ア 実際に活用できる有効で具体性のある道徳教育の全体計画の作成

全体計画は、各学校において、校長の方針の下に、道徳教育推進教師を中心に、全教職員の参加と協力を得ながら創意と英知を結集して独自に作成されるものである。その際に、小・中学校学習指導要領解説道徳編に示された「基本的把握事項」と「具体的計画事項」を含めて作成することが望まれる。

- 児童生徒、学校及び地域の実態を考慮して、道徳教育の重点目標を設定する。
 - 道徳の内容との関連を踏まえた各教科等における指導の内容及び時期を示す。
 - 「心のノート」の活用方針を示す。
 - 家庭、地域社会、近隣の学校、関係機関との連携の方針を示す。 など
- ※ 評価・改善していくという視点をもつことが大切である。

イ 計画的・発展的に展開できる道徳の時間の年間指導計画の作成

道徳の時間の年間指導計画は、道徳教育の全体計画に基づき、各教科等との関連を考慮しながら、計画的、発展的に授業がなされるように作成されるものである。内容項目相互の関連性、学校や学年段階ごとの発展性を考慮したり、重点的に取り上げる内容項目を検討し、多様な指導を工夫したりすることが望まれる。

- 全体計画に基づき、各学年ごとの基本方針を具体的に示す。
- 展開の概要（学習活動の流れと主な発問）及び指導の方法を示す。
- 補助資料として、「心のノート」の活用を位置付ける。 など

ウ 指導内容の重点化における配慮と工夫

道徳教育を進めるに当たっては、児童生徒の発達の段階や特性等を踏まえ、指導内容の重点化を図ることが大切である。その際、社会的な要請や今日的課題につい

ても考慮し、次の内容の重点化について配慮することが求められる。

<すべての学校や学年を通じて配慮すること>

- 自立心や自律性の育成
- 自他の生命を尊重する心の育成

<学校や学年段階ごとに配慮すること>

- 基本的な生活習慣の育成
- 規範意識の育成
- 人間関係を築く力の育成
- 社会参画への意欲や態度の育成 など

(2) 機能的な協力体制の整備

学校が組織体として一体となって道徳教育を進めるためには、全教職員が力を発揮できる体制を整える必要がある。そのためには、道徳教育推進教師を中心とした指導体制を充実させ、そのリーダーシップや連絡、調整の下で、全教師が主体的な参画意識をもってそれぞれの役割を担うように努めることが重要である。

<道徳教育推進教師の機能化チェック(例)>

- 道徳教育の指導計画の評価・改善を行っている。
- 各学級の道徳の時間の実施状況を把握している。
- 各学級の道徳の時間の充実のために指導助言している。
- 道徳教育の校内研修を実施している。
- 校外の道徳教育に関する研修の内容を回覧等で校内に情報提供している。 等

2 児童生徒の心に響く道徳教育の推進

児童生徒の心に響く道徳教育を推進するためには、道徳の時間の充実はもとより、豊かな心を育む基礎づくり(よりよい人間関係の醸成、道徳性の育成に資する体験活動の推進等)や開かれた道徳教育の展開(家庭や地域社会との連携等)を一層図る必要がある。

(1) 人間関係と学校環境の充実

学校や学級内の人間関係や環境は、様々な側面から児童生徒の道徳性の発達に影響を与えるものであることを踏まえ、それらを整えるとともに、学校における

<人間関係と学校環境を充実させるポイント>

- 授業以外の日常的な生活場面における指導を生かす。
- 児童生徒をよりよく受容し、理解する態度等を示す。
- 児童生徒が互いに認め合い、助け合い、学びあう機会と場を積極的に設ける。
- 学校や学級の環境を豊かな感性を培うよう整備する。

道徳教育の指導内容が児童生徒の日常生活に生かされ、人間としての生き方についての自覚を深めることができるよう配慮することが大切である。

(2) 体験活動を生かした道徳教育

児童生徒の内面に根ざした道徳性を育成するためには、学校の教育活動全体において各教育活動の特質や児童生徒の興味・関心を考慮し、豊かな体験をさせることが必要である。特に今回の学習指導要領では、ボランティア活動、自然体験活動に加えて、発達の段階を踏まえた指導を重視する観点から、小学校においては集団宿泊活動が、中学校においては職場体験活動が体験活動の例として追加されている。

また、道徳の時間においては、これらの体験活動を効果的に生かすことによって、道徳的価値の自覚を深める指導を一層充実させることが重要である。

<体験活動を生かすポイント>

- 全体計画や年間指導計画の中に、体験活動を位置付ける。
- 体験活動の中で感じたことや考えたことと道徳の時間の指導との関連を図る。
※道徳の時間は直接的な体験活動そのものを行うのではないことに留意する。



小中合同での体験活動の様子

(3) 異校種等との連携を生かした道徳教育

一人の子どもの成長を考えたとき、小学校から中学校、中学校から高等学校などの学校間の移行には連続性がある。発達段階に応じた一貫性のある道徳教育を推進するには、学校種間の円滑な連携・接続を図ることが重要である。

<異校種等との連携のポイント>

- 機能的な組織づくりに着手する。
例：管理職のリーダーシップや推進者の役割と責任の明確化による組織づくり
- 全教職員の共通理解を促進する。
例：「育てたい子どもの姿」系統表の作成や合同研修、協同的な体験活動等の取組とおした共通理解
- 段階的な連携を推進する。
例：Ⅰ.相互理解（授業参観や情報交換会の開催等）Ⅱ.相互交流（合同研修会や部活動での交流等）Ⅲ.相互連携（生徒指導体制の確立や合同での体験活動等）といった段階的な連携

(4) 家庭や地域社会との連携による道徳教育

道徳教育は、一貫した方針を保ちながら、学校・家庭・地域社会の三者がそれぞれの役割を果たすことによって、一層充実を図ることができる。

<家庭や地域社会との連携のポイント>

- 家庭や地域社会との共通理解を深める。
 - ・道徳の時間の授業を公開し、授業参観後に懇談会を実施する。
- 道徳の時間への積極的な参加や協力を得る。
 - ・授業の実施への保護者、地域の人々や諸団体等の協力を得る。
 - ・地域教材の開発や活用への協力を得る。
- 地域全体で道徳教育を推進する。
 - ・多様な人々との交流を深める。
 - ・地域での企画・運営に参加したり諸団体と連携をしたりする。
 - ・家庭や地域社会と一体となって道徳性を高める実践活動を推進する。

家庭や地域社会との連携による道徳教育を進めるためには、まず、学校が道徳教育において家庭や地域社会の果たす役割を十分に認識しておく必要がある。そして、学校から家庭や地域社会との密接な交流を進めていき、協力体制を整えとともに、具体的な連携方法について様々な工夫をしていく必要がある。



保護者対象の道徳の体験授業

自校の「家庭・地域との連携」の状況について	はい	いいえ
「道徳の時間」を保護者に公開している。	91%	9%
「道徳の時間」を地域の人々に公開している。	71%	29%
道徳教育について保護者（または地域の人々）と懇談会をもっている。	49%	51%
道徳教育の取組みを学級・学年・学校通信やホームページ等で紹介している。	65%	35%
保護者や地域の人々の参加・協力を求めた道徳の授業を行っている。	51%	49%
地域の人々の協力を得て、魅力的な教材を開発している。	39%	61%
道徳性を養う体験活動等に保護者や地域の人々の参加を求めて行っている。	61%	39%

「平成23年度『心の元気!』1000人フォーラムアンケート結果」

〈当日の保護者の声〉

- ・参観日などに積極的に参加して、授業内容について子どもと話していこうと思います。
- ・道徳教育の可能性に親近感がもてました。
- ・保護者もがんばるので、先生方もきっちり情報公開（通信や懇談会等）をして、一緒に子どもを育てていきましょう。など

3 道徳の時間の指導

道徳教育の要としての道徳の時間は、学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育を補充・深化・統合する時間であり、年間指導計画に基づき、児童生徒や学級の実態に即し、道徳の時間の特質に基づく適切な指導を展開していくことが大切である。

(1) 道徳の時間の目標

道徳の時間の目標は、学校の全教育活動を通じて行う道徳教育と密接な関連を図りながら、計画的、発展的な指導によって、それらを補充・深化・統合し、道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考え（※中学校では、下線部が“道徳的価値及びそれに基づいた人間としての生き方についての自覚”となる）を深め、道徳的実践力を育成することである。

道徳的価値の自覚については、発達の段階に応じて多様に考えられるが、例えば、次の三つの事柄を押さえておくことが考えられる。

〈道徳の時間の特質〉

道徳の時間は、児童生徒一人一人が、一定の道徳的価値の含まれるねらいとのかかわりにおいて自己を見つめ、道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考え（※中学校では、下線部が“道徳的価値及びそれに基づいた人間としての生き方についての自覚”となる）を発達の段階に即して深め、内面的資質としての道徳的実践力を主体的に身に付けていく時間である。

〈道徳的価値の自覚を深めるために押さえるべき三つの事柄〉

○ねらいとする道徳的価値を理解する。

- 「こういうことって大切なことだな。」
「こんな生き方があるんだな。」
「こんな考え方ってとてもいいな。」

○自分とのかかわりで道徳的価値をとらえる。

- 「自分はどうかだろうか。自分にもこんないいところがあるぞ。」
「自分はこんな考え方だけど、ああいう考え方って自分にはなかった考え方だな。」

○道徳的価値を自分なりに発展させていくことへの思いや課題を培う。

- 「こんな考え方を自分もできるといいな。」
「こんな生き方をしてみたい。」
「自分のこんな考え方や生き方を大切にしていこう。」

道徳的実践力を育てることを目的とする道徳の時間においては、その特質を十分に理解して、教師の一方的な押し付けや単なる生活経験の話合いなどに終始することのないように特に留意し、道徳の時間の特質にふさわしい指導の計画や方法を講じ、指導の効果を高める工夫をすることが大切である。

(2) 道徳の時間の特徴を生かした指導

ア 学習指導の構想

ねらいの検討

指導内容や教師の指導の意図を明らかにする。

指導の要点の明確化

ねらいに関する児童生徒の実態と、それを踏まえた教師の願いを明らかにし、各教科等での指導との関連を検討する。

資料の吟味

使用する資料の特質やねらいとのかかわりで道徳的価値がどのように含まれているか、資料に対する児童生徒の感じ方、考え方等を分析する。

指導過程の検討

児童生徒がどのような問題意識をもって学習に臨み、ねらいとする道徳的価値を追求し、多様な感じ方や考え方によって学び合うことができるかを具体的に予想しながら、それが効果的になされるための発問を吟味したり、授業の全体の展開を構想したりする。

＜一般的な道徳の時間の指導過程＞ ※（ ）内は中学校

導入	<p>主題に対する児童生徒の興味や関心を高め、学習への意欲を喚起して、ねらいの根底にある道徳的価値（及びそれに基づいた人間としての生き方）の自覚に向けて動機付けを図る段階</p>	<p>導入の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 主題に関わる問題意識をもたせる。 ○ 資料の内容に興味や関心をもたせる。 ○ 学習への雰囲気作りを大切にする。
展開	<p>主題のねらいを達成するための中心となる段階であり、中心的な資料によって、児童生徒一人一人がねらいの根底にある道徳的価値（及びそれに基づいた人間としての生き方）についての自覚を深める段階</p>	<p>展開の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 中心的な発問等を軸として一体となった発問の構成を考える。 ・ 児童生徒の実態と資料の特質を踏まえた発問をする。 ・ 児童生徒がどのような問題意識をもち、どのようなことを中心にして話し合うのかについての主題が明確になった学習とする。
終末	<p>ねらいの根底にある道徳的価値（及びそれに基づいた人間としての生き方）に対する思いや考えをまとめたり温めたりして、今後の発展につなぐ段階</p>	<p>終末の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 学習を通して考えたことや新たに分かったことを確かめる。 ○ 自らの道徳的な成長や明日への課題などを実感させる。

＜資料分析の手順例＞

- ① 場面分け
- ② 登場人物の心の動きの読み取り
- ③ 登場人物の心の動きに含まれる道徳的価値の押さえ
- ④ 児童生徒の感じ方、考え方の予想
- ⑤ 資料の中心場面の決定



校内研修（資料分析等）の様子

イ 指導方法の工夫

道徳の時間に生かす指導方法には多様なものがある。ねらいを効果的に達成するためには、ねらい、児童生徒の実態、資料や学習指導過程に応じて、最も適切な指導方法を選択し、工夫して生かすことが必要である。

資料を提示する工夫

【Point】 資料の内容について臨場感をもって理解し、主人公や筆者の感じ方や考え方に共感するようにする。

(具体例) 大型の絵、紙芝居、影絵、人形やペープサート、VTR、地域講師の活用

発問の工夫

【Point】 児童生徒の問題意識や疑問などを生み出し、多様な感じ方や考え方を引き出す。

(具体例) 児童生徒の意識の流れに沿った発問、考える必然性や切実感のある発問、自由な思考を促す発問

話合いの工夫

【Point】 意見を出し合う、まとめる、比較するなどの目的に応じた効果的な話合いが行われ、児童生徒相互の考えを深める。

(具体例) 座席の配置や移動、討議形式、グループやペアによる話合いの工夫、名札の活用

書く活動の工夫

【Point】 児童生徒が自ら考えを深めたり、整理したりする機会とする。

(具体例) 道徳ノート、学習シートの活用

表現活動の工夫

【Point】 児童生徒の共感的・実感的な理解につなげる機会とする。

(具体例) 役割演技、動作化や劇化の工夫、人形やペープサートの活用

板書を生かす工夫

【Point】 児童生徒の思考を深め、学級全員の共通のノートとして生かす。

(具体例) 対比的・構造的に示す板書、中心部分を浮き出させる板書

説話の工夫

【Point】 児童生徒の思考を一層深めたり、考えを整理させたりする。

(具体例) 教師の体験や願い、新聞・雑誌・テレビなどで取り上げられた問題

(3) 道徳の時間の指導の充実と配慮事項

ア 魅力的な教材の開発や活用

道徳の時間の目標の達成を図り、児童生徒に充実感をもたらすような生き生きとした指導を進めるためには、道徳の時間の資料となる魅力的な教材を多様に開発し、その効果的な活用を図ることが大切である。

教材の開発に当たっては、教材の具備すべき要件を踏まえ、道徳の時間の特質を生かした展開が可能となるよう、活用を視野に入れて工夫することが求められる。



読み物教材例集・授業展開例集

開発された教材の活用にあたっては、その内容や形式等の特徴を押さえ、授業に資料として位置付けたとき、児童生徒がその内容をどのように受け止めるかを予想するなどして、提示の工夫、発問の仕方の工夫等を併せて検討しておくことが求められる。

参考HP：ホットライン教育ひろしま「読み物教材例集・授業展開例集」

イ 表現し考えを深める工夫

言葉は、知的活動だけでなく、コミュニケーションや感性、情緒の基盤であり、学校の教育活動全体で言葉を生かした教育の充実が求められている。道徳の時間においても、その言葉を生かした教育についての充実が図られなければならない。

日ごろの授業から、例えば役割演技や動作化、劇化などの表現活動の工夫も含め、話し合いの場や方法の一層の充実を図っていく必要がある。

ウ 情報モラルの問題に留意した指導

情報モラルとは情報社会で適正な活動を行うための基になる考え方と態度ととらえることができる。道徳の時間においては、道徳の内容との関連を踏まえて、例えば、情報モラルに関する題材を生かしたり、情報機器のある環境を生かしたりするなどして指導に留意することが求められる。

- ・他者への思いやりや礼儀の問題
- ・友人関係の問題
- ・法やまじりの遵守に伴う問題

道徳の内容との関連（例）

なお、道徳の時間の特質を踏まえ、例えば、情報機器の使い方やインターネットの操作、危険回避の方法やその際の行動の具体的な練習を行うことにその主眼をおくのではないことに留意する必要がある。

- ・情報モラルにかかわる題材を生かして話し合いを深める。
- ・コンピュータによる疑似体験を授業の一部に取り入れる。
- ・児童生徒の生活体験の中の情報モラルにかかわる体験を想起させる。

創意ある多様な指導の工夫（例）

4 「心のノート」の効果的な活用

「心のノート」は、児童生徒が身に付ける道徳の内容を分かりやすく表したものであり、児童生徒が道徳の内容について自ら学ぶとともに、教師や保護者、地域の人々が多様な機会に生かすことのできる道徳用教材として、文部科学省により、平成14年度から作成・配布されてきたものである。

これまで各学校においては、道徳の時間をはじめとして計画的な活用がなされてきたが、平成23年度からは、冊子としての全国配布がなくなり、WEB版心のノートを活用することとなった。WEB版による計画的な活用の推進はもとより、WEB版の良さを生かした効果的な取組が期待される場所である。

今後は、「心のノート」を活用し、親と子どもが、守るべき社会のルールなどについて話し合い、一緒に考えるなど、とりわけ学校と家庭との「心の架け橋」となる取組が一層求められる。例えば、「わが家で取り組む〇原則」を決めて親子ともに一定期間取り組んでいくなど、家庭でのルール作り

＜「心のノート」の三つの特徴＞

- 子ども一人一人が自ら学習するための冊子
- 子どもの心の記録となる冊子
- 学校と家庭との「心の架け橋」となる冊子

わが家で取り組む〇原則

おうちの方と一緒にやってみよう

①心のノートを写しながらおうちの方と相談して、一緒にがんばるめあてを決めよう。
【めあて1】

【めあて2】

②目標がはかってみよう。

めあて	日(月)	日(日)	日(水)	日(木)	日(金)	日(土)
〇〇〇〇						
〇〇〇〇						

③目標を振り返ろう。

【おうちのめあて】

「わが家で取り組む〇原則」(例)

などに活用することも考えられる。

このように、「心のノート」作成の基本的な考え方や三つの特徴を踏まえ、「いつでも」「どこでも」「何度でも」「誰とでも」活用することで、児童生徒が自己の生き方について考え、自ら道徳性を育むことが可能である。

5 高等学校における道徳教育

道徳教育は、豊かな心を持ち、人間としての在り方生き方の自覚を促し、道徳性を育成することをねらいとする教育活動であり、社会の変化に対応して生きていくことができる人間を育成する上で重要な役割をもっている。

高等学校における道徳教育は、人間としての在り方生き方に関する教育であり、公民科やホームルーム活動を中心に各教科・科目等の特質に応じ学校の教育活動全体を通じて、生徒が人間としての在り方生き方を主体的に探求し豊かな自己形成ができるよう、適切な指導を行うことが求められている。

特に、高等学校においては、小・中学校と異なり道徳の時間が設けられていないこともあって、学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育の指導のための配慮

＜高等学校における道徳教育推進のポイント＞

- 教職員間での道徳教育に係る共通理解を図る。
 - 計画的・継続的な指導を行うための組織づくりを行う。
 - 推進上、基軸となる機会と場を設定する。
 - 固有の指導内容・指導方法、教材を開発する。
- ※小・中学校の道徳教育を基礎として
- 自己の生き方を社会とのかかわりで探求させる。

が必要である。「高等学校における道徳教育推進のポイント」を踏まえ、学校の実態や生徒の発達の段階等にふさわしい教育活動を行うことが大切である。

高等学校における教材の開発やその活用（例）（県立西条農業高等学校の取組）

西条農業高等学校では、農業教育を通して、生命の尊さを学び、自他の命を尊重する態度と豊かな心を育む道徳教育の推進をめざしている。

【具体的な取組事例】

○教材の開発

教材開発に当たっては、全教職員による一貫性のある道徳教育が組織的に展開できるよう留意し、全教職員が参画し、特別活動（ホームルーム活動）で活用できる読み物資料を作成した。

○教材の活用

活用に当たっては、教師自身が道徳教育をより意識し、意図的に道徳教育を実践していくことができるよう、「道徳性育成の視点」を明示した学習指導案を作成し、全学年で授業を実施した。（但し、ホームルーム活動のねらい達成が第一義であることに留意しなければならない。）



【開発教材】

- 「生命に関する写真（人間、豚、牛等）」（第1学年）
- 「命と向き合う～子牛の生と死を通して～」（第2学年）
- 「未来の命を通して」（第3学年）

命と向き合う ～子牛の生と死を通して～

牛舎内の一角に設けられた三メートル四方の分べん室では、出産を運搬後にひかえた牛がいます。名をサッキといひ、本校で生まれ育った雌牛で、今回で二回目の出産を迎えます。

その日サッキはいつもと様子が変わっていません。朝からクワンチョン代わりに敷いたお糞などの敷料の上に降り込み、動こうとせず、息も少し流いような様子でした。そして、時折足をのめるくさをしていました。このくさは陣痛が始まっている証拠です。

その様子を見て先生たちは、「いふふ単いですね。また産前前というのに」「ん、早いですね、おかしいですね」と話をしていました。

今日、八月八日は二年生の総合実習の日でした。いつもの点呼の後、今日は分べん室でいふふ単いですね。産後よければ見られるかもしれませんが、その時まだ連絡します」と先生から連絡がありました。

そして、それぞれの部門に分かれて実習が始まりました。

分べん室では、いつもの出産と違う様子に先生は、サッキの子宮の中心手を入れ、子牛の状態を確認しました。これは逆子かもしれん、すぐに獣医さんに連絡を取り、来てもうこうこうに

そして、プロジェクトの調査に来て備が始まりました。母牛であるサッキの床に直探検しないよう、わらを厚めに子宮から引っ張り出すための助産子。人後の母牛に飲ませる味噌汁が置かれ新鮮なわらが敷き詰められ、また別の準備されています。

資料「命と向き合う」（一部抜粋）